The Japan Lung Cancer Society

P-226 原発性肺癌の成長速度とAg-NORsの関連

東北大学抗酸菌病研究所外科
○薄田勝男，斉藤泰紀，遠藤千顕，高橋里美，菅間敬治，佐川元保，佐藤雅美，永元則義，藤村重文

目的：原発性肺癌切除例において，その成長速度とAg-NORs(Argyrophil nucleolar organizer regions)の関連を明らかにすることを目的とした。
方法：胸部X線写真で腫瘍の成長速度が計測でき，ホルマリン固定パラフィン包埋ブロックを用いてAg-NORs染色が可能であった原発性肺癌８２例を対象とした。組織型は腺癌４８例，扁平上皮癌２６例，大細胞癌４例，小細胞癌２例，カルチノイド１例，腺扁平上皮癌１例であった。病理学的病期はI期４３例，II期１０例，IIIA期１９例，IIIB期９例，IV期１例であった。腫瘍の成長速度は胸部X線写真を用いて，Schwartzの式よりvolume doubling time(DT)で算出した。Ag-NORs染色は、癌病巣のパラフィン包埋ブロックより３μmの切片を作り、１％蟻酸で溶解した２％ゼラチン溶液と５０％硝酸銀溶液を１対２の割合で混合したものを用いた。
結果：DTは、38～1077日(mean±SD,207±219日)であった。癌細胞１核あたり平均Ag-NORs数は1.4～6.6(mean±SD,3.46±1.24)であった。DTが120日以下，121～240日，241日以上の平均Ag-NORs数は，それぞれ4.30±1.00，2.78±0.43，2.14±0.46であり，各群間に有意差を認めた。扁平上皮癌の平均Ag-NORs数は4.36±1.33と，腺癌の3.00±0.94に比較し有意に大であった。切除予後に関しても検討する予定である。
結論：肺癌例ではAg-NORs数はDTと負の相関を示した。

P-227 非小細胞性肺癌での、増殖関連因子における同時２重染色の比較検討

長崎大学病院第１外科
山口慎也、田川 泰、松尾 聡、辻 博治、原 信介
川原克信、綾部公懿、富田正雄

非小細胞性肺癌の手術より得られた臨床標本にて、凍結標本よりKi-67とAgNORsの２重染色、パラフィン標本よりPCNAとAgNORsの２重染色を行い癌細胞の増殖活性、癌増殖関連因子(Ki-67、PCNA、AgNORs)の比較、臨床病期または組織学的分化度との相関、リンパ節転移との関係を検討し悪性度の指標に成るかどうかを検討した。手術より得られた検体を－80℃の凍結標本と中性緩衝ホルマリンで前固定したパラフィン包埋標本をどちらも4μmにて薄切し、AP標識のLSAB法にてKi-67抗体とPC10抗体を用いファーストレッドにて染色し、その後AgNOR染色を行った。どちらも顕微鏡にて400倍でKi-67陽性もしくはPCNA陽性を判定し、1000倍にて核内のAgNOR数を注意深く数えた。陰性も同様にAgNOR数を数えた。Ki-67陽性例やPCNA陽性例のAgNOR数は陰性例のAgNOR数よりも増加傾向であった。Ki-67陽性率とAgNOR数は相関関係にあったがPCNA陽性率とAgNOR数は相関しなかった。Ki-67陽性率やPCNA陽性率またはAgNOR数は組織学的分化度と相関するが臨床病期分類とは相関しなかった。またKi-67陽性のAgNOR数はリンパ節転移(+)の症例にてリンパ節転移(-)の症例よりも増加傾向にあった。PCNA陽性のAgNOR数も同様であった。以上よりKi-67とAgNORの同時２重染色やPCNAとAgNORの同時２重染色は単染色よりも非小細胞性肺癌の増殖活性、分化度、悪性度リンパ節転移の有無をより詳細に細胞動態から解析でき有用な方法であると思われた。

P-228 スクリーニングとしての腫瘍マーカー測定意義

多摩がん検診センター呼吸器科[1]，東京医科大学第一外科[2]，東京都がん検診センター[3]
○松島　康[1]，三浦弘之[2]，小高達朗[2]，輿石晴也[2]，高橋英介[2]，野口正之[3]，萩原　勁[3]，加藤治文[2]

目的：現在腫瘍マーカーは多くの癌の治療効果の判定や癌治療後の経過観察，再発の指標として汎用され効果をあげているが，早期癌の発見に関してはまだその有用性に疑問の点が多い。我々はセンターを受診した肺精検者を対象に複数腫瘍マーカー測定の癌早期発見に対する有用性を検討した。
対象：平成２年７月～４年５月末までのセンター受診者753例の内，症状，既往，家族歴，嗜好，また希望などから531例が対象とされ，検査は原則としてＣＥＡ，ＴＰＡ，ＮＳＥ，ＳＣＣの４種類とした。
結果：531例中109例（延べ144例）に何らかの異常を認めた。４項目の内単項目異常は延べ113例で全項目異常の一例は直腸癌肺転移例であった。項目別異常ではＣＥＡ異常が最も多く（延べ61例），因果関係では喫煙，肝障害などとの関係が示唆され禁煙や肝機能の改善で正常化する例も認められた。確認された悪性疾患21例中マーカー異常を認めたのは11例でＣＥＡ異常から肺癌が，ＳＣＣ異常から卵巣腫瘍がそれぞれ一例ずつ発見された。他臓器を含めた精査でも明らかな因果関係を確認できない例が約３割にあった。
考察：多項目腫瘍マーカー測定の早期癌発見に対する貢献度はそれほど高くない。しかし他疾患，他悪性腫瘍の発見例もあることから初診時での検査意義はあると考える。マーカー異常原因確定不能例の追跡調査を行うことで今後悪性疾患早期発見の一助となる可能性がある。

P-229 原発性肺癌における腫瘍マーカー測定の臨床的意義

兵庫医科大学第三内科
○相原信之，中野孝司，岩橋徳明，前田重一郎，竹中雅彦
波田寿一，東野一彌

目的：原発性肺癌の血清および胸水中の各腫瘍マーカーを測定し，その臨床的意義について検討した。
対象と方法：対象は原発性肺癌67例（内，胸水貯留24例），良性胸膜炎19例（結核性14例，細菌性３例，その他２例）である。血清および胸水中の脂質結合シアル酸（LSA），CEA，SCC，NSE，ADA，LDH，laminin P1を測定した。測定法はLSAはKatopodisとStockの方法により，ADAはEIA法，LDHはUV法，その他はRIA法で測定した。
結果と考察：①胸水細胞診陽性群，陰性群間に差はみられず，腫瘍マーカーでの鑑別は困難であると思われた。②血清LSA，CEAは良性胸膜炎と有意の差があり，両者の鑑別に有用であると思われた。③laminin P1は小細胞癌に高い傾向にあったが，M0症例，M1症例間に差はなく，遠隔転移の指標にはなり得なかった。④小細胞癌においては治療が奏効した群に，NSEの有意な低下を認め，治療のモニタリングに有用であると考えられた。

NII-Electronic Library Service